

ハ ラ シ ョ ー хорошо*な街 モスクワ

在ロシア日本国大使館附属モスクワ日本人学校

坂本 大朗



Здравствуйте (ズドゥラーストゥビイチェ：こんにちは)。約1億4千万人が住み、世界で1番大きな国土をもつロシア。首都モスクワの人口は、約1100万でヨーロッパの都市では最大である。女性の平均寿命は75歳。これに対して、男性はなんと63歳である（こんなにも低いのは、ウォッカの飲みすぎだけが原因ではない）。モスクワには日本人は、約1600人住んでいる。意外に思うかもしれないが、夏の気温は30度を超える日もある。また、夏の日照時間は長く、夜11時でも空が明るい。もちろん冬は寒く、マイナス25度になることもあり、朝9時を過ぎても真っ暗だ。

◆学校生活

1967年にアパートの2部屋で本校の授業は始まった。ヨーロッパにできた最初の日本人学校で、当時の児童・生徒は16人であった。2012年には創立45周年を迎え、児童・生徒数は年々増加傾向にあり、今では145人（2013年4月15日現在）が在籍している。校舎は5階建ての建物に4校が同居しており、1階にスウェーデン人学校、2階にイタリア人学校、3階にフィンランド人学校の子どもたちが生活をしている。体育館やグラウンドは、共有スペースなので譲り合って使用している。昨年度は、ロンドンオリンピックにちなんで、4校合同のオリンピックを行い、スポーツで交流を深めた。教員も同居校の授業を参観して、教科書や授業展開などさまざまな違いに触れられることで、

よい研修の場となっている。

国際理解教育として、小学部・中学部ともに現地校との交流を行っている。小学部が交流を続けている1239番校（日本の公立学校に相当する学校はこうした番号制になっている）とは25年以上のおつきあいだ。中学部は、1535番校と相互に学校訪問を行い理解を深めている。日本語を勉強している生徒たちとの「フリートーク」の時間には、片言の日本語とロシア語、英語を駆使して自分たちの思いを伝えようと必死だ。共通の話題は音楽とアニメである。なんと日本のコスプレ文化も人気で、モスクワにもアキバ系がいるのだ。現地校からリクエストのある授業は「書道」。漢字に興味をもっている生徒が多く「彩」「恋」等を書いて満足気だ。映画監督の黒澤明や北野武の映画から日本に興味をもつ生徒もいるようだ。

冬の気候は厳しく、帽子、手袋、スキューウェア、ブーツは必需品であり、登下校では着用を義務づけている。脳ミソが凍るほど冷えるため、耳まで隠れる帽子が必要である（ちなみに、マイナス25度を下回ると休校になる）。子どもたちは厳重装備で外出して、いざ雪遊び！ しかし、水分が少なく砂のような雪なので雪玉ができない。もちろん雪だるまもつukれない。この時期、学校のテニスコートは、スケートリンクになる。アイスホッケークラブで活動している生徒が多く、冬の体育もスケートである。街中のあちこちにリンクができて、無料で楽しめるところもある。また、公園も多く、クロスカントリースキーを楽しんでいる人も少なくない。本校の委員会活動では、寒くて室内に閉じこもりがちなの季節だからこそ、楽しく外で身体を動かせるように、「モスリンピック」を企画して、雪上フラッグや雪上ムカデ競争などの競技を上級生と下級生が一緒になってチームで争っている。

◆モスクワの生活

モスクワ市は、中央にあるクレムリンから同心円状に市街地が広がり、放射線状に幹線道路が延びている。これを3つの環状線が結んでいる。外側の環状線はムカードといい、1周108kmである。ムカードの内側には、1戸建ての家はほぼゼロ。人々はドームといわれるマンションやアパートの集合住宅に住んでいる。ダーチャという別荘を所有している市民もいて、休日にはそこで家庭菜園



現地校の生徒と交流



「モスリンピック」雪上ムカデ競争

をつくったり、ベリーやきのご狩りなどをしたりして自然のなかで過ごす人が多い。今年の夏は気温が高く、高緯度のモスクワでも夏は高温になるためクーラーを設置する家も少なくない。冬は集中暖房で建物全体を暖め、25度程度を保っている。日本からヒートテックを持ち込んだが、部屋の中で着ていると暑くてたまらない。

ドームや店の入り口には、アフラーナ（警備員）が常駐している。また、建物には、監視カメラが多く設置されている。怖い顔のロシア人ににらまれ、どこにいてもカメラに狙われている生活に最初は違和感をもった。2004年にベスラン市の中等学校で起きた学校占拠事件後、本校においても安全対策が強化され、5人の警備員を雇い厳重な警備を行っている。

1935年に開通したメトロ（地下鉄）は、長くて速いエスカレーターを下ると豪華な彫刻で彩られたホームに出る。時間帯によっては、わずか1分間隔で電車がやってくる。また、モスクワの公共交通機関を利用すると、お年寄りや小さな子ども連れなどに席を譲る光景をよく見かける。困っている人を助けることは特別なことではないのだ。一方、地上は慢性的な交通渋滞だ。道路の構造上の問題もあるが、運転マナーはお世辞にもよいとはいえない。当然事故も多く、しかも衝突したままの現状維持で警察を待たなくてはいけないので、さらに渋滞が激しくなる。そのため救急車は、緑地帯に片輪を転がしながらやって来る始末だ。渋滞を回避するために、バックで逆走していく車や歩道を走行していく車など目を疑うような運転を見ることもできる。そういえば、タクシーの運転手がこんなことを言っていた。「ここはクレイジーモスクワだ」と。

ロシアの料理といえば、ピロシキを思い浮かべ

る人が多いと思うのだが、キャベツや肉、ブルーベリーなど具を入れて焼いたパンはすべてピロシキと呼ばれている。ボルシチも有名だが、ロシアのスープは種類が多く、野菜たっぷり美味しくである。ウハというスープは、あら汁に似ていて日本を思い出す味つけである。また、古くインドから伝わったチャイ（紅茶）を愛飲している人も多い。サモワールという芸術品のようなポットからお湯を注ぎ、それはそれは甘いパンやお菓子と一緒に楽しむのだ。そして忘れてはいけないのがウォッカ（アルコール度数40以上で冷凍庫でも凍らない）。ウォッカグラスになみなみと注いで、乾杯しながら一気に流し込む。クランベリージュースをチェイサー代わりにしながら、料理と一緒に楽しむのだが、乾杯の理由は尽きることはない。また、日本料理の人気は高く、寿司はもちろんのこと、日本のうどんチェーン店には、ロシア人が行列をつくっている。

「怖い顔をした大男がウォッカを片手に地味で白黒な街を闊歩している」、このようなマイナスイメージをいだいていたモスクワだが、すぐに間違いだと気づかされた。雪が解け、5月になると花壇が彩り、木々が緑に繁り、街中が鮮やかな色彩になる。モスクワの短い夏は、日光を浴びる貴重な時期でもある。湿気がなく爽やかな風に吹かれて公園に出かけると、のんびりと散歩する老夫婦や家族に出会う。日本人だとわかると優しく笑って声をかけてくる。

鉛色の空が広がり、白く冷たい雪に覆われ、氷点下の世界に包まれる長い冬を乗り切るためには、限られた夏の時間をのびのびと贅沢に過ごすことと、優しく温かい気持ちでいることが大切なんだと教えられたような気がする。ここでの生活は、忘れかけていた大事なことを気づかせてくれる。

До свидания（ダ スヴィダーニャ：さようなら）。

* ハラショー：ロシア語でよい、すばらしいの意